

平成31年度  
 劇場・音楽堂等機能強化推進事業  
 (地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)  
 成果報告書

団 体 名	株式会社 東京演劇集団風	
施 設 名	レパトリーシアターKAZE	
助 成 対 象 活 動 名	普及啓発事業	
内定額(総額)	3,962	(千円)
公 演 事 業	0	(千円)
人 材 養 成 事 業	0	(千円)
普 及 啓 発 事 業	3,962	(千円)





(3) 平成31年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	演劇体験事業 『ヘレン・ケラー ～ひびき合うものたち』	2019年8月30日～9月1日	一般・児童向けバリアフリー演劇『ヘレン・ケラー～ひびき合うものたち』 出演：白根有子、渋谷愛ほか 演出：浅野佳成	目標値	240
		レパトリーシアターKAZE		実績値	386
2	教育連携事業 鹿児島城西高等学校	2019年10月19日	芸術研修のためのワークショップ 演出・俳優との交流 講師：浅野佳成・俳優：渋谷愛、高階ひかりほか	目標値	30
		レパトリーシアターKAZE		実績値	30
3	第23回凱旋公演 『Touch～孤独から愛へ』	2019年12月24日、25日	『Touch～孤独から愛へ』 出演：柳瀬太一、佐野準ほか 演出：浅野佳成	目標値	160
		レパトリーシアターKAZE		実績値	181
4	教育連携事業 東京都高等学校 国語教育研究会	2019年12月28日	教員に向けた演劇的手法によるコミュニケーションワークショップ 講師：西垣耕造・辻由美子ほか	目標値	30
		レパトリーシアターKAZE		実績値	26
5	教育連携事業 茨城県立結城第二高等学校	2020年3月16日	ニューディレクション・ワークショップ 講師：西垣耕造、辻由美子、柴崎美納	目標値	120
		茨城県立結城第二高等学校		実績値	26
6	劇場体験週間『ヘレン・ケラー ～ひびき合うものたち』	2020年2月28日～3月1日	障害者施設利用者及び中学生以上一般向けバリアフリー演劇『ヘレン・ケラー～ひびき合うものたち』 出演：白根有子、渋谷愛ほか 演出：浅野佳成	目標値	350
		レパトリーシアターKAZE		実績値	205
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	

## 2. 自己評価

### (1) 妥当性

#### 自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

新型コロナウイルス感染拡大防止措置として、当初の計画から2つの事業にやむなく変更があったが、全般的に、地域間・国内外とのネットワーク・連携力を強化し、専属実演者・関係団体との協議を細やかに行ったことで、ミッション「独自性を持つ企画によって、あらゆる人に現代演劇の新しい風を」に基づき事業を進めることができた。

〈特筆点〉事業番号1および6の〈バリアフリー演劇の上演〉は、非常に多くの反響があり、地域の様々な観客が来場した。地域のニーズ「多様な観客と一緒に芸術活動に参加できる機会の創出」「障害を抱えた住民の文化芸術活動の充実・発展」に貢献した。しかし、計画を超える申し込みがあったため、今後の見直しを持った計画策定が課題となる。

#### 〈大きな計画変更〉

##### ○事業番号1 実施時期、実施回数

当初:7月20日～22日、3回 変更後:8月30日、31日(2s)9月1日(2s)、5回

理由:事業の充実のため、実施時期を「夏休み後半」に変更。夏休み期間中の広報活動から申し込み・口コミが広がり、当初予定公演が2週間前に完売。急遽追加公演を実施。

##### ○事業番号5 実施回数、対象者 実施時期

当初:3回、高校1学年120名程、1月下旬 変更後:1回、教員、3月16日

理由:コロナウイルスの影響により実施回数・対象者・実施時期を変更

##### ○事業番号6 作品内容、実施回数

当初:作品名『肝っ玉おっ母とその子供たち あとから生まれてくる人たちに』実施回数7回

変更後:バリアフリー演劇『ヘレン・ケラー～ひびき合うものたち』実施回数4回

理由:障害当事者・福祉関係者からの「次は家族と一緒に観たい」など要望が強く、「誰もが共に楽しめる演劇」として地域内での口コミがある演目に変更。しかしコロナウイルスの影響により、社会福祉法人(作業所等)との提携公演(3公演)を中止、事業規模を縮小した。申込者からのキャンセルもあり多く、計画を達成することはできなかった。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

文化発信地である地域の特色・ニーズに対し、劇場の強み・特色を生かした事業展開を継続的に行っていくことで、地域からの信頼感・口コミが高まり、多様な環境を抱えた地域住民、障害者、芸術を学ぶ学生に対し、本格的な芸術に出会う機会を創出することができた。

また、劇場を広く開放し、バックステージや座談会などを行い、俳優、スタッフと交流できる機会を作り出し、芸術を間近に参加体験できる学びの劇場として、教育分野や地域コミュニティに貢献することができた。

広報活動およびネットワーク拡充の成果として、地域の教育機関や公共文化施設関係者、視覚、聴覚障害者、知的、精神障害を持つ方たちの来場が多くなり、高い満足度となった。さらに、これまでになかった未就学児・小学生とその家族の来場も定着しつつある。

全国的にもモデルとなる質の高い普及啓発活動、および実演者・スタッフの合理的配慮への意識向上、ノウハウの蓄積・発信は、新たな観客との出会い、他の舞台芸術への興味関心の派生、教育活動の発展、地域の新たな文化活動・表現活動に繋がるのが期待されている。また、劇場において、障害の有無に関わらず誰もが舞台芸術に触れられること、互いを理解し認め合えることが、これからの共生社会を作り出す一歩として期待が大きい。

## (2) 有効性

### 自己評価

目標を達成したか。

#### 【目標に対して】

##### 〈子どもたち・若者が演劇に触れる機会を創出する〉

教育機関との連携で事業番号 1・2・3・6 においては未就学児、保育園、小学生、中学生、高校生、大学生、若者が演劇を体験することができた。継続して連携を行う中野区内の東京工芸大学からは、台湾、中国の留学生も参加。公演後の演出家による〈現代芸術について〉の講演、俳優との座談会、質疑応答、バックステージが行われ「〈演劇〉というジャンルから学生の創作意欲が引き出された」と担当の方から報告があった。

##### 〈地域住民の劇場へ足を運ぶ機会の創出、地域間の連携力を高める〉

地域の様々な家庭状況や身体的・知的・精神的障害を持つ地域住民が芸術活動に参加できるよう、地域の社会福祉団体、教育機関、公共施設団体と公演実施までに細やかな交流を図り、ニーズに対応した鑑賞機会・交流体験プログラムを策定。近隣の図書館との連携では、普段は劇場に足を運んだことがない家族連れ・在日外国人も劇場を訪れた。俳優・スタッフ、観客間での交流が和やかに行われ、地域コミュニティの再生に貢献することができた。

##### 〈誰もが“感動を共有できる劇場”づくり〉

最寄駅から劇場への送迎・車椅子利用者や盲聾者への合理的配慮を行い、普段は劇場に通うことが困難な方も来場することが可能となった。〈バリアフリー演劇〉独自の事前舞台説明、バックステージツアー、俳優・スタッフとの交流は健常者にも大変好評だった。障害者への理解の向上や、舞台を見る楽しみが増えたなどの声が多く、障害の有無、年代を超えたあらゆる人が一緒に演劇を楽しめる機会の創出に繋がった。

#### 【指標に対して】

事業番号	来場者目標値	来場者実績値	達成度	「劇場にまた来たい」	「舞台芸術をもう一度見たい」	実施回数	バックステージ・座談会実施回数	達成度
1	240	386	161%	97%	96%	5回	5回	100%
2	30	30	100%	-	-	1回	1回	100%
3	160	181	113%	78%	78%	3回	3回	100%
4	30	20	67%	-	-	1回	1回	100%
5	120	20	17%	-	-	1回	1回	100%
6	350	205	59%	95%	95%	4回	4回	100%
計	930	842	91%	Ave.90%	Ave.89.6%	15回	15回	Ave.100%

来場者数の目標値(930)に対し、実績値(842)となり、91%の達成率となり、コロナでの事業縮小を鑑みても、指標は達成したと考えられる。小劇場ならではの細やかな対応・間近な演劇鑑賞体験・バックステージツアー・座談会などの100%実施により、「劇場にまた来たい」「舞台芸術をもう一度観たい」率は辛うじて90%となった。交流体験プログラムに興味を持って来場する参加者も非常に多く、舞台がつくられる裏側や俳優・スタッフへの関心が極めて高い。

事業番号3, 6はまだ50%に達してないが事業番号1では60%と高く、バリアフリー演劇への関心の高さが感じられる。内容としては、「弱視聾者への配慮をいただきありがとうございました」「負けないで自分らしく生きようと強く感じ涙が止まりませんでした」「(盲聾者)「隣に座っていた健常者の人と一緒に笑った」(聴覚障害者)「同じ空間で人と一緒に見ることができた」(全盲者)など。さらにバリアフリー演劇は、若者が〈演劇〉と違う視点で出会い、自己を発見する学びの場としても有効であることを発見できた。

【教育連携事業】は現役の俳優が講師として参加したことで、様々な質疑応答が生まれた。事後調査では、「ひとつの質問にたくさん細かく教えてくださいました」「『詩劇』という今まで見たことがなかったような表現で、もっといろいろなものを見たい」「失敗を怖れず挑戦していきたい」などの意見があった。

### (3) 効率性

#### 自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

#### 【事業期間について】

全体的に、対象者および連携協力団体との協議のもと事業期間を変更したことで、事業を滞りなくかつ対象者にとって最も効果的な形で事業を進めることができた。

特に事業番号 1 においては、学校の夏休み終盤に変更したことで、障害の有無を問わず親子連れの観劇が増えた。

また、継続的に実施している事業番号 2, 4 は、学校・教育機関との協議を重ねたことで、例年以上の反響・成果を得ることができた。

○事業番号 1: 7 月 20 日、21 日、22 日 3st→8 月 30 日、31 日、9 月 1 日 5st に変更

変更理由: 子どもたち・家族も演劇鑑賞をできるように夏休み後半に変更した。

事業番号 2: 11 月上旬予定→10 月 19 日

変更理由: 2009 年より継続する事業。現役の高校生だけではなく都内在住の卒業生も集まれる日程で実施するため、学校との協議で日程を変更。

○事業番号 3: 12 月 23 日～25 日→12 月 24 日～25 日

変更理由: 本作品での全国巡回公演最終日が九州(鹿児島)で行われていたため。

事業番号 4: 12 月上旬→12 月 28 日

変更理由: 期末テストの週と重なるため、先生方との協議により変更。2017 年から継続してレパートリーシアターKAZE で実施している国語科教員に向けたワークショップ。半数以上の先生が初めて参加。自らの身体の変化を感じることで人と人との関係づくりを考えていく機会になった。

○事業番号 5: 1 月下旬→3 月 16 日

変更理由: 新型コロナウイルス感染防止のため、実施時期を早めることが困難だった。

○事業番号 6: 3 月上旬 7st→2 月 28 日～3 月 1 日 4st

変更理由: 社会福祉施設、作業所と日程を調整していたが、新型コロナウイルス感染拡大防止措置のため、3 公演が中止、規模を縮小した。

#### 【事業費】

事業予算は要望時から決算をみると全体で 93.33%とほぼ予定通り行うことができた。

事業番号 1,6 では、新たなチケット料金枠を設定し、介助者および未就学児の無料枠、小・中・高校生の特別料金(¥2000)を設定。その結果、これまで申込の少なかった障害当事者・家族連れでの申込が増え、公演の 2 週間前には完売。観客からの要望に応えるため追加公演を行ったことで出演料が増額となった。バリアフリー演劇上演については、計画策定時の公演回数・実施期間をより多く確保すること、殺到する申し込みに対応できる受付システムの見直しが課題となる。また、レパートリーによる上演によって、舞台費、バリアフリーの経費がかなり削減できたが、今後は、観客・参加者への合理的配慮はもちろん、創り手側のサポートを必要とする人への十分な配慮部分も(視覚障害者の支援者への謝礼・通訳者への謝礼等)事前に予算化し、確固とした体制を整えていきたい。

## (4) 創造性

### 自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

#### 〈レパトリーシアターKAZEの資源〉

レパトリーシアターKAZEは高い芸術作品を目指す専属団体・東京演劇集団風を持ち、地域に根付き、独自のレパトリーシステムによる独自性、現代性のあるレパトリーを創出し、人々や社会に発信し、貢献していく劇場である。

#### 東京演劇集団風受賞歴

2004年 第11回湯浅芳子賞・戯曲上演部門

2004年 第4回倉林誠一郎記念賞・団体賞

2004年 第11回読売演劇大賞個人賞 辻由美子

2005年 フランス共和国芸術文化勲章シュヴァリエ

2007年 第2回ガラ・スター国際演劇祭『ピカソの女たち～オルガ』で辻由美子が最優秀大賞受賞

2018年 第20回テアトロ演劇賞『記憶の通り路』、他の作品に対して

#### 新代表の就任

東京演劇集団風の創立1987年から代表を担ってきた俳優・辻由美子から、2019年4月俳優・柳瀬太一が就任。柳瀬は『肝っ玉おっ母とその子供たち』『マハゴニー市の興亡』（ベルトルト・ブレヒト作、浅野佳成演出）、『記憶の通り路』（マテイ・ヴィスニユック作、江原早哉香演出）、『Touch～孤独から愛へ』（ライル・ケスラー作、浅野佳成演出）などの現代演劇における主演俳優として評価を得ている。また創立時から毎年200ステージを上演する全国巡回公演のチーフプロデューサーとして創造運営を担っている。

#### 繰り返しの実践と評価をつくり、人々にとっての演劇、劇場の未来形を示していく

事業番号1では、舞台手話通訳者を複数名から一人が専任。演出家、俳優とともに風のビジョンを共有し、障害を持つ人の情報を手話通訳者と交換しながら徹底した稽古を繰り返すことができ、非常に高い評価を得た。劇場から全国の劇場へも発信し、さらに特別支援学校、聾学校でも上演。レパトリーシステムの大展開となった。

事業番号3『Touch～孤独から愛へ』など他のレパトリー作品の舞台の質の向上に繋がっている。レパトリーシアターKAZEと全国巡回公演で繰り返し上演していくことで、障害の有無、年代を超えて（演劇の発信者でもある）観客にとっての劇場、舞台と観客が人と人の繋がりを考えられる共生社会への貢献となった。また障害者へのサポート（公演申し込みから、受付、入場時の優先順、事前説明、上演、舞台見学）のノウハウが蓄積されている。これは社会福祉、芸術を目指す若い人材へのサポートにも影響を与えている。

#### 劇場の設備・安全保障

小劇場の空間を生かした、舞台美術のクオリティの高さには定評がある。国内外の一流アーティストがプランを務めている。2019年公演事業では、高田一郎氏が舞台美術を担った。ワイヤーを使用した演出作品も多い中で、その成果が観客に十分に伝わり安全に行えるように、「労働安全衛生法による特別教育修了証」の（巻き上げ運転）を劇団員が取得した。

## 自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

2005 年から継続する〈劇場体験週間〉では、近隣の教育機関、社会福祉法人と連携し「間近に演劇を鑑賞・体験する機会」を創出し続けてきた。その成果が地域に浸透し、行政・教育・福祉の関係者との信頼関係・協力体制が強固となっている。（区・都の教育委員会、区内中学校・小学校、東京工芸大学、東中野図書館、中野区内地域センター、近隣商店街、都内、近隣の教育機関、演劇部など）

さらに、これまでのネットワークを最大限に発揮し〈バリアフリー演劇〉を製作・上演。

（共催団体：社会福祉法人グロー、社会福祉法人愛成会、字幕や音声ガイドの製作のプロフェッショナル palabra 株式会社、監修にあたった特定非営利活動法人シアターアクセシビリティ・ネットワーク、非特定営利法人バリアフリー映画研究会、アーツサポ東京ほか）。これらの団体が持つネットワークを活かすことで、広域の地域からの参加者、多数の取材があった。また、広報活動も充実し、中野区社会福祉協議会・法人、点字図書館、を主軸に、全国の盲聾学校、聴覚障害者団体、特別支援学校等に働きかけた。さらに、他の劇場からの視察も増加。地域の芸術文化の振興、文化芸術活動の発展に繋がったと考える。

「手話をやってみたい」（小学生）「こういう公演ならうちの子にも見せてあげられる」（聾者の母親）などの感想や、バリアフリー演劇を体験した障害者から、通常公演にも申し込みがあったなど、バリアフリー演劇が人々・社会に与える影響・可能性は大きい。今後も引き続き、劇場の持つ資源をフルに活用し、地域に貢献する劇場をつくっていきたい。

中野区報 表紙



## (5) 持続性

### 自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

#### 【創造を運営する体制および中長期計画】

レパトリーシアターKAZE を、障害有無や年代を超えて演劇を体験する機会のない人たちのために劇場を開放し、30年後も充実した活動を持続させていくため、企画創造、運営、広報の全てを行う俳優・スタッフによる新体制を確立、動き出した。過去3年間200ステージ以上を、在籍9年以上の20代～70代の俳優・スタッフが企画・実行・検証し、改善して取り組んできた。今後3カ年の中長期経営計画を策定。3年後には、実演者への充実した保障を確保できるよう、融資計画および公演毎の収支計画をたて、実現に向けて動き出している。

レパトリーシアターKAZE の企画・運営・制作を担う劇場企画部は、在籍年数が長く、地域・海外のネットワーク・劇場運営のノウハウを有している。劇場企画部の作成した計画は、総会で全劇団員に共有され、劇場企画部の細やかな指示のもとで俳優・スタッフが実行。実演者自らが全国の教育機関・他の劇場・福祉団体との連携を深めながら、年間の計画を実行していく。公演毎のスケジュール・プログラム作成・進行は一貫して劇場企画部が担い、実施後は、参加者へのアンケートやヒアリングによる関係団体への事後調査を実施。その内容を踏まえ、事業計画の精査・改善に取り組んでいる。劇場企画部の仕事内容は、劇場の芸術監督・代表取締役によって年に4回開かれる総会にて精査される。

中野区内の社会福祉施設、団体、地域の人、教育機関、近隣の商店会などとのネットワークは、着実に深まってきており、行政機関からの信頼も高く、その経験と実績を活かして強化していく。支持会員であるアトリエの会の観劇率は常に50%以上を超えている。バリアフリー演劇では入場できなかった人が多く、事業期間の確保と同様に、交流、発信の在り方を改善し、これまで以上に支持基盤をつくっていく。

#### 【人材育成】

○実習生・研究生の募集、若い人々に向けたアプローチの改善にも取り組み、2020年度は2名の実習生が劇団員となった。未だ、雇用率が低いことが課題だが、3年後には雇用率の向上を達成する。

○バリアフリー演劇をきっかけに演劇志望者だけでなく、福祉・教育に志を持った学生への育成プログラムも開始。経験値の高い実演者を大学や病院に派遣し、ワークショップを実施している。

○今後の劇場を発展させていくことを目的に、レバノンのフェスティバル「月と隣人ー私たち」への実演者・スタッフの海外派遣を行った。（地域住民と作り上げ、くあらゆる人に劇場を開放する）ことを狙いとしたフェスティバルとして、ヨーロッパ中から注目を集めているフェスティバル）

○劇場運営を担う俳優・スタッフに向けたゼミナールを企画。（調査検証、アンケートを用いた検証について（太下義之氏を招いた）／障害者への合理的配慮について（山上庄子女史を招いた））

#### 【劇場の改修、改善】

○車椅子、視覚、聴覚障害の人、サポートする側も動きやすく、心地よい空間になるように、1階ロビーの大規模に改修、ウォシュレットトイレへの全移行を行った。また、冷暖房も新たに設置。ロビー内のスペースは限りがあり外で開場を待つ人もいるので、外の受付ピロティー空間にも冷暖房を設置。隔離した喫煙所、盲導犬用トイレも新たに設置した。3階部分に位置するトイレは「誰でもトイレ」として再整備した。

○設計者自らが劇場のメンテナンスを年に一度行い、50年後も安全かつ衛生的に使えるよう劇場を整備している。2019年は屋上部分の修繕を行った

○劇場内の衛生管理として冷暖房の点検、掃除を設備会社に委託した。今回のコロナウイルスの感染防止対策のため、常に掃除、換気、消毒、手洗い、必要に応じてマスクの着用を徹底して行っている。